



古事記朗唱大会

平成27年1月24日(土) 奈良県新公会堂

開演11時／終演16時(予定) 能楽ホール



主催：奈良県

NaraKimiManga Project 2013-2020
なら紀紀・万葉

主催者あいさつ

奈良県知事 荒井正吾

「古事記のまつり」にお越しいただき、誠にありがとうございます。

奈良県では2012年（平成24年）から2020年（平成32年）までの9年間、「古事記」「日本書紀」「万葉集」に代表される歴史素材を活用した事業を効果的に展開し、「本物の古代と出会い、本物を楽しめる奈良」を実現していくための取り組みとして「記紀・万葉プロジェクト」を推進しています。

本日、当プロジェクトのシンボルイベントとして、昨年度に引き続き2回目となる「古事記朗唱大会」を、そして、新たに「子ども古事記かるた大会」を開催いたします。

「古事記」を唱え、また、古事記かるたで遊ぶことをとおし、「古事記」の新たな魅力を味わっていただくことで、「古事記」をあまり知らない方には「古事記」に親しみ、既に知っている方もより一層理解を深めていただけるのではないかと思います。

なお、今回、朗唱箇所を訓読文のみで紹介しております。「古事記」の原文をもとに読み下した訓読文は、口承で伝えられてきた「古事記」の持つリズムを感じるのにふさわしいと考えたからです。「古事記」を朗唱する姿やその言葉から、そこに込められた意味や思いを、皆さまお一人おひとりの心で感じとっていただければ幸いです。

どうぞこの古くて新しい催しを、唱えて、聴いて、見て、体を動かして、存分にお楽しみください。

また、このまつりを盛り上げるため、県内の市町村長の皆さまをはじめとして、各界の方々にお集まりいただき厚く御礼申し上げます。

今後もこの「古事記のまつり」を継続して開催し、「古事記」編纂・完成の地「奈良」の奥深い魅力を県内外に向けて発信して参りたいと思います。どうぞご期待ください。

古事記のまつり

監修 千田 稔

「古事記」には、古代の人々が語り、歌い、踊り、演じた感情が渦巻いています。

「古事記」には、自然と人間が、躍動している、自由闊達な、澄みきつた世界が表現されています。

「古事記」を心の底から、大きな声で語り、高らかに歌い、のびやかに身体を動かし、

なつかしい日本の魂に触れてみようではありませんか。

古事記のまつり。それは屈託のない自分が、そこにいる喜びを発見する瞬間なのです。



第2回「古事記朗唱大会」

プログラム

平成27年1月24日（土）
奈良県新公会堂・能楽ホール
11:00 開演／16:00 終演

【第二部】

15 15 14 14 13 13
時 時 時 時 時 時
50 30 50 30 10 05
分 分 分 分 分 分

11 11 11 11
時 時 時 時
15 10 05 00
分 分 分 分

主催者挨拶
オープニング朗唱
主催者朗唱
招待者朗唱

招待者朗唱
参加者朗唱
ゲスト朗唱
参加者朗唱
お楽しみ賞発表・抽選会
ファイナーレ朗唱

（20組）
(8組)

休憩

奈良県議会副議長 奈良県立橿原考古学研究所所長 奈良県立図書情報館館長 奈良県知事
天理市長 桜井市長 横井市長 奈良県神事
御所市長 宇陀市長 並河谷田岡井荒井
三郷町長 明日香村長 曽爾村長 多
吉野町長 広陵町長 川上村長 東吉野村長
河合町長 大淀町長 三重県関西事務所長
吉野町長 本山下岡井村川田 松本山北岡山森芝森竹東川井菅千井
利治 実昭正忠守篤徳由一康吉裕秀宏幹正文正徳吾正徳吾正徳吾
上田 清 落語家 大和郡山市長

賣太神社宮司 藤本 保文
賣太神社古事記輪読会 会場のみなさま

※都合により出演時間が変更になる場合があります。あらかじめご了承ください。

参加者朗唱（参加者一覧）

- | | | |
|---------------------------------|---------------------------|---------------------------------|
| 1 SWEET HARMONY (兵庫県神戸市) | 10 丸山章 (奈良県大和郡山市) | 19 このはなさくらしディース(三重県名張市) |
| 中村宏 山本純子 | | 種市利枝 伊藤洋 木下美代子 森嶋一美 |
| 2 古事記伝承会 (兵庫県神戸市) | 11 鈴木哲也 (愛知県名古屋市) | 新城史子 谷要利子 龜谷ユミ |
| 今井昭司 堀田春美 飯田真理子 | | |
| 山本幸子 吉井敏高 麻生美佐子 | 12 上田敏一 (奈良県橿原市) | 20 神野栄美 (大阪府松原市) |
| 原田貞子 | | |
| 3 新井茂 (奈良県奈良市) | 13 岸川豊 (石川県河北郡内灘町) | 21 榎本保夫 榎本妙子 (愛知県半田市) |
| 4 腹話術 さくらぐみ (奈良県奈良市) | 14 右京おはなしの会 (奈良県奈良市) | 22 三宅古事記朗唱の会 (奈良県磯城郡三宅町) |
| 谷崎尚子 | 船津喜美子 岡佳子 吉房啓子 | 打越邦雄 北浦恵子 藤巻和子 |
| 5 ロマン音曲 大東亜ヒサゴショウ (奈良県奈良市) | 後藤節子 | 藤本三四子 藤本良矩 森内哲也 |
| 江ノ島ひさこ アンシャンフクベ | | |
| 6 吉田淳子 (大阪府大阪市) | 15 清田洋子 (奈良県北葛城郡河合町) | 23 米崎和美 (大阪府守口市) |
| 7 宇陀禮子 宇陀安希子 (奈良県奈良市) | 16 賣太神社 古事記輪読会 (奈良県大和郡山市) | 24 塩谷邦明 (富山県射水市) |
| 8 門馬米子 (奈良県宇陀市) | 鈴木哲也 赤熊晴美 油谷富子 石川雅弘 | 25 西大和トリオ (奈良県北葛城郡河合町) |
| 9 明日香村伝承芸能保存会 | 岩田のり子 奥田友子 奥田陽子 落合横子 | 芝崎和成 五福麻奈実 五福克己 |
| 万葉朗唱の部 (奈良県高市郡明日香村) | 梶田幸恵 斎藤健治 佐藤真千子 | |
| 河井幸子 神田和江 立見作太郎 | 錢井正子 野呂和子 藤原清子 | |
| 立見千代子 野瀬静代 森本美代子 | 藤本真喜子 松村泰造 松村佳子 | |
| 森井伸子 | 山村順子 吉川貴美子 | |
| 18 萌黄 (東京都世田谷区) | 26 白神裕子 上泉貴世 (奈良県奈良市) | 27 西大和保育園未来組①のみなさん (奈良県北葛城郡河合町) |
| 村田昌子 杉本光子 | 上田崇玄 小野孝明 小野礼愛 勝部花音 | 上田崇玄 小野孝明 小野礼愛 勝部花音 |
| 28 西大和保育園未来組②のみなさん (奈良県北葛城郡河合町) | 勝間慎一郎 川口聖翔 幸田大良 | 勝間慎一郎 川口聖翔 幸田大良 |
| 田中悠珠 田村和華 演口皓誠 藤井響生 | 酒田博仁 佐藤伸樹 嶋崎心美 橋にこ | 酒田博仁 佐藤伸樹 嶋崎心美 橋にこ |
| 的場颶斗 三ヶ月智彩 森紅葉里 | | |
| 横尾颶太郎 吉田陽太 吉村拓人 | | |
| 吉村はるな | | |

【朗唱箇所・上巻 序・古代の回想】

臣安万侖言す。夫、混沌元既に凝りて、氣・象未だ効れず。名も無く為も無ければ、誰か其の形を知らむ。然れども、乾坤初めて分れて、參はしらの神造化の首と作れり。陰陽斯に開けて、二はしらの靈群の品の祖と為れり。所以に、幽・顯に出で入りして、日・月・目を洗ふに彰れたり。海水に浮き沈みして、神・祇・身を濂ぐに呈れたり。故、太素は杳冥けれども、本つ教に因りて土を孕み島を産みし時を識れり。元始は綿邈けれども、先の聖に頼りて神を生み人を立てし世を察れり。寛に知りぬ、鏡を懸け珠を吐きて、百の王相続ぎ、劍を喫み蛇を切りて万の神蕃息りしことを。安の河に議りて天の下を平げたまひ、小浜に論ひて國土を清めたまひき。

主催者朗唱

奈良県知事 荒井正吾

【朗唱箇所・上巻 建御雷神の派遣】

かれしかして、その大国主の神に問ひたまひしく、「今、なが子事代主の神、かく白しつ。また白すべき子ありや」ここに、また白しづく、「また、あが子建御名方の神あり。こを除きてはなし」と、かく白す間に、その建御名方の神、千引きの石を手末に擎さげて來、「誰ぞ、わが国に来て、忍ぶ忍ぶかく物言ふ。しかば、力競べせむ。かれ、あれ先づその御手を取らむ」と言ひき。かれ、その御手を取らしむれば、立水に取り成し、また、剣刃に取り成しつ。かれしかして、懼りて退き居りき。しかし、その建御名方の神の手を取らむと、乞ひ帰して取らせれば、若草を取るがこと抜批みて投げ離ちたまへば、逃げ去にき。

【朗唱箇所・上巻 初発の神々】

天地初めて發りし時に、高天の原に成りませる神の名は、天之御中主の神（高の下の天を訓みてアマといふ。下これに效へ）。次に、高御產集日の神。次に、神產集日の神。此の三柱の神は、みな独神と成りまして、身を隠したまひき。次に、國稚く、浮ける脂のごとくして、くらげなすただよへる時に、葦牙の如く萌え臘る物によりて成りませる神の名は、宇摩志阿斯詞備比古遅の神。次に、天之常立の神（常と訓みてトコといひ、立と訓みてタチといふ）。この三柱の神も、みなに独神と成りまして、身を隠したまひき。
上の件の五柱の神は、別天つ神ぞ。

奈良県立図書情報館館長 千田 稔

【朗唱箇所・上巻 須賀の宮】

故ここをもちてその速須佐之男命、宮造作るべき地を出雲國に求きたまひき。ここに須賀の地に到りまして詔りたまひしく、「吾此地に来て、我が御心すがすがし。」とのりたまひて、其地に宮を作りて坐しき。故、其地をば今に須賀と云ふ。この大神、初めて須賀の宮を作りたまひし時、其地より雲立ち騰りき。ここに御歌を作みたまひき。その歌は、
八雲立つ 出雲八重垣 妻籠みに 八重垣作る その八重垣を
ぞ。ここにその足名椎神を喚びて、「汝は我が宮の首任せ。」と告りたまひ、また名を負せて、稻田宮主須賀之八耳神と號けたまひき。

と云ひき。後にその伊須氣余理比賣、宮の内に参入りし時、天皇御歌よみしたまひけらく、

【朗唱箇所・中巻 皇后の選定】

すなはちその美人を娶して生める子、名は富登多多良伊須氣余理比賣命と謂ひ、亦の名は比賣多多良伊須氣余理比賣へはそのほどと云ふ事を思みて、後に名を改めつるぞ。」と謂ふ。故、ここをもちて神の御子と謂ふなり。」とまをしき。

ここに七媛女、高佐土野に遊行べるに、伊須氣余理比賣その中にありき。ここに

大久米命、その伊須氣余理比賣を見て、歌をもちて天皇に白しけらく、

倭の 高佐土野を 七行く 媛女ども 誰れをし枕かむ

とまをしき。ここに伊須氣余理比賣は、その媛女等の前に立てりき。すなはち天皇、その媛女等を見したまひて、御心に伊須氣余理比賣の最前に立てるを知らして、歌をもちて答へたまひしく、

かつがつも いや先立てる 兄をし枕かむ

とこたへたまひき。ここに大久米命、天皇の命をもちて、その伊須氣余理比賣に詔りし時、その大久米命の跡ける利目を見て、奇しと思ひて歌ひけらく、

胡鶲子鶴鶴 千鳥ま鷦など跡ける利目

とうたひき。ここに大久米命、答へて歌ひけらく、

媛女に 直に遇はむと 我が跡ける利目

とうたひき。故、その媛女、「仕へ奉らむ」と白しき。ここにその伊須氣余理比賣の家、狹井河の上にありき。天皇、その伊須氣余理比賣の許に幸行でまして、一宿御寝しましき（その河を佐草河と謂ふ由は、その河の邊に山由理草多にありき。故、その山由理草の名を取りて、佐草河と號けき。山由理草の本の名は佐草

【朗唱箇所・中巻 国を知らす天皇】

是を以て、各道さえし國の政を和し平げて、覆奏しき。爾くして、天の下太きに平ぎ、人民富み榮えき。是に、初めて男の弓端の調・女の手末の調を貢らしめき。故、其の御世を称へて、初国を知らす御真木天皇と謂ふぞ。又、是の御世に、依網池を作り、亦、輕の酒折池を作りき。天皇の御歳は、壹佰陸拾捌歳ぞ（戊寅年の十二月に崩りましき）。御陵は、山辺道の勾之岡の上に在り。

天理市長 並河 健

【朗唱箇所・上巻 大國主神の国作り】

桜井市長 松井正剛

ここに大国主神惣ひて告のりたまはく、「吾独して何か能くこの國を得作らむ。いざれの神と吾と能くこの國を相作らむ」とのりたまひき。この時、海を光して依り来る神あり。其の神言ひたまはく、「能く我が前を治めば、吾能く共に相作り成さむ。若し然らずば、國成り難けむ」とのりたまひき。ここに大国主神、「然らば治め奉る状は奈何」とまをしたまへば、「吾をば倭の青垣の東の山上に伊都岐奉れ」と答へ言ひたまひき。此は御諸山の上に坐す神なり。

御所市長 東川 裕

【朗唱箇所・下巻 八田若郎女と皇后の嫉妬】

即ち宮に入り坐さずして、其の御船を引き遊りて、堀江に訴り、河の隨に山代に上り幸しき。此の時に歌ひて曰はく、

つぎねふや 山代河を 河上り 我が上れば、河の上に 生ひ立てる 島草樹
を 島草樹の木 其が下に 生ひ立てる 葉広 斎つ真椿 其が花の 照り坐し
其が葉の 広り坐すは 大君ろかも

即ち、山代より廻りて、那良の山口に到り坐して、歌ひて曰はく、

つぎねふや 山代河を 宮上り 我が上れば あをによし 奈良を過ぎ 小
橋 傑を過ぎ 我が見が欲し国は葛城 高宮 我家の辺

宇陀市長 竹内幹郎

【朗唱箇所・中巻 神々の祭祀】

又、伊迦賀色許男命に仰せて、天の八十びらかを作り、天神・地祇の社を定め奉りき。又、宇陀の墨坂神に、赤き色の楯・矛を祭りき。又、大坂神に、黒き色の楯・矛を祭りき。又、坂の御尾の神と河の瀬の神とに、悉く遣し忘ること無くして、幣帛を奉りき。これに因りて、役の氣、悉く息み、國家、安らげく平けし。

又、歌ひて曰はく、

梯立の 倉崎山は 嫌しけど 妹と登れば 嫌しくもあらず
故、其地より逃げ亡せて、宇陀の蘇邇に到りし時に、御軍、追ひ到りて殺しき。

三郷町長 森宏範

【朗唱箇所・上巻 国生み・神生み】

此の速秋津日子・速秋津比売の二はしらの神の、河・海に因りて持ち別けて、生みし神の名は、速那芸神。次に速那美神。次に類那芸神。次に類那美神。次に天之水分神。次に、國之水分神。次に、天之久比奢母智神。次に、國之久比奢母智神（速那芸神より國之久比奢母智神に至るまでは、并せて八はしらの神ぞ）。

次に、風の神、名は志那都比古神を生みき。次に、木の神、名は久々能智神を生みき。次に、山の神、名は大山津見神を生みき。次に、野の神、名は鹿屋野比禿神を生みき。亦の名は野椎神と謂ふ（志那都比古神より野椎に至るまでは、并せて四はしらの神ぞ）。

曾爾村長 芝田秀数

【朗唱箇所・下巻 速總別王と女鳥王】

時に、其の妻女鳥王の歌ひて曰く、

雲雀は 天に翔る 高行くや 速總別 雀取らさね
天皇、此の歌を聞きて、即ち軍を興し、殺さむと欲ひき。爾くして、速總別王・女鳥王、共に逃げ退きて、倉崎山に勝りき。是に、速總別王の歌ひて曰はく、
梯立の 倉崎山を 嫌しみと 岩懸きかねて 我が手取らすも

明日香村長 森川裕一

【朗唱箇所・上巻 序・古事記撰録の完成】

大抵記せる所は、天地の開闢けしより始めて小治田の御世に訖る。故、天御中主神より以下、日子波限建鶴草葺不合命より以前をば、上つ巻と為、神倭伊波礼鬼古天皇より以下、品陀の御世より以前をば、中つ巻と為、大雀皇帝より以下、小治田大宮より以前をば、下つ巻と為、并せて三巻を錄して、謹みて献上る。

広陵町長 山村吉由

【朗唱箇所・中巻 倭建命の熊曾征伐】

爾くして、其の楽の日に臨みて、童女の髪の如く、其の結へる御髪を梳り垂れ、其の娘の御衣・御裳を服て、既に童女の姿と成り、女人の中に交り立ちて、其の室に入り坐しき。爾くして、熊曾建の兄弟二人、其の娘子を見咸でて、己が中に坐せて、盛りに樂びき。故、その酣なる時に臨みて、懷より剣を出し、熊曾が衣衿を取りて、剣を其の胸より刺し通し時に、其の弟建、見畏みて逃げ出でき。乃ち、その室の椅の本に追ひ至り、其の背の皮を取りて、剣を尻より刺し通しき。

河合町長 岡井康徳

【朗唱箇所・下巻 三重の采女】

天皇、其の、蓋に浮ける葉を看行して、其の嫁を打ち伏せ、刀を以て其の頭に刺し充て、斬らむとせし時に、其の嫁、天皇に白して曰はく、「吾が身を殺すこと莫れ。白すべきこと事有り」といひて、即ち歌ひて曰はく、
纏向の 日代の宮は 朝日の 日照る宮 夕日の 日光る宮 竹の根の 根

足る宮 木の根の 根延ふ宮 八百士よし い杵築きの宮 真木栄く 檜の御門 新嘗屋に 生ひ立てる 百足る 機が枝は 上つ枝は 天を覆へり 中つ枝は 東を覆へり 下枝は 脚を覆へり 上つ枝の 枝の末葉は 中つ枝に 落ち触らばへ 中つ枝の 枝の末葉は 下つ枝に 落ち触らばへ 下枝の 枝の末葉は 在り衣の 三重の子が 持がせる 瑞玉蕊に 浮きし脂落ちなづさひ 水こをろこをろに 是しも あやに畏し 高光る 日の御子事の語り言も 是をば
故、此の歌を献しかば、其の罪を赦しき。

吉野町長 北岡 篤

【朗唱箇所・下巻 吉野の童女】

天皇、吉野宮に幸行しし時に、吉野川の浜に童女有り。其の形容、美麗し。故、是の童女に婚ひて、宮に還り坐しき。
後に、更に亦、吉野に幸行しし時に、その童女が其處に遇へるを留めて、大御呉床を立てて、其の御呉床に坐して、御琴を弾きて、其の娘子に側を為しめき。爾くして、其の娘子がよく側ひしに因りて、御歌を作りき。其の歌に曰はく、
呉床居の 神の御手もち 弾ぐ琴に 側する女 常世にもがも

大淀町長 岡下守正

【朗唱箇所・上巻 序・古事記撰録の発端】

飛鳥の清原の大宮に大八州御しめし天皇の御世に暨りて、潛龍元を体し、清雷期に応す。夢の歌を聞きて、業を纂がむことを相へ、夜の水に投りて基を承

けむことを知りたまひき。然れども、天の時未だ疎らすして、南山に蟻蟻し、人事共給はりて、東国に虎歩したまひき。皇輿忽ち駕して、山川を凌え度り、六師雷のごとく震ひ、三軍電のごとく逝き。杖矛威を挙げて、猛士烟のごとく起り、絳旗兵を耀かして、囚徒瓦のごとく解けき。

川上村長 栗山忠昭

【朗唱箇所・上巻 猿女の君】

ここに猿田毘古神を送りて、還り到りて、すなはち悉に鰐の広物、鰐の狹物を追ひ聚めて、「汝は天つ神の御子に仕へ奉らむや。」と問ひし時に、諸の魚皆「仕へ奉らむ。」と自す中に、海鼠曰さざりき。ここに天宇受命、海鼠に云ひしく、「この口や答へぬ口」といひて、紐小刀もちてその口を折書き。故、今に海鼠の口折るなり。ここをもちて御世、島の速賛獻る時、猿女君等に給ふなり。

出で來たり。その井に光有り。爾くして、問ひしく、「汝は、誰ぞ」ととひしに、答へて白ししく、「僕は、國つ神、名は井水鹿と謂ふ。此は吉野首等の祖ぞ」とまをしき。

東吉野村長 水本 実

【朗唱箇所・下巻 阿岐豆野】

是に、天つ神諸の命以て、伊耶那岐命・伊耶那美命の二柱の神に詔はく、「是のただよへる国を修理ひ固め成せ」とのりたまひ、天の沼矛を賜ひて、言依し賜ひき。故、一柱の神、天の浮橋に立たして、其の沼矛を指し下して書きしかば、塙こをろをろに書き鳴して、引き上げし時に、其の矛の末より垂り落ちし塙は、累り積りて島と成りき。是、淤能基島ぞ。

み吉野の 袁牟漏が嶽に 猪鹿伏すと 誰れそ 大前に奏す やすみしし
我が大君の 猪鹿待つと 吳床に坐し 白榜の 衣手着そなふ 手脚に蟻

かきつき その蟻を 嫖蛤早咲ひ かくの如 名に負はむと そらみつ 倭
の国を 嫖蛤島とふ
といひき。故、その時よりその野を號けて阿岐豆野と謂ふ。

三重県関西事務所長 松本利治

大和郡山市長 上田 清

【朗唱箇所・上巻 淑能基島】

是に、天つ神諸の命以て、伊耶那岐命・伊耶那美命の二柱の神に詔はく、「是のただよへる国を修理ひ固め成せ」とのりたまひ、天の沼矛を賜ひて、言依し賜ひき。故、一柱の神、天の浮橋に立たして、其の沼矛を指し下して書きしかば、塙こをろをろに書き鳴して、引き上げし時に、其の矛の末より垂り落ちし塙は、累り積りて島と成りき。是、淤能基島ぞ。

春風亭小朝（しゅんぶうていこあさ）

一九五五年東京生まれ。一九七〇年春風亭柳朝に入門。



一九八〇年三十六人抜きで真打昇進。これまでに落語界初の日本武道館公演、歌舞伎座、新橋演舞場、京都南座、博品館劇場三十日間連続独演会などを成功させてきている。二〇一四年には、明治座、博多座、新歌舞伎座でも独演会を開催。俳優としては、新宿コマ劇場の座長公演をはじめとして、TV時代劇「三匹が斬る！」の他、NHKの大河ドラマ「篤姫」では近衛忠熙役を、「軍師官兵衛」では明智光秀役を務める。趣味はクラシック音楽とジャズで、これまでに全国の八つのオーケストラを指揮、自らのジャズグループも結成した。また、落語家ユニット「六人の会」のリーダー的存在もある。

参加者朗唱

1. SWEET HARMONY

兵庫県神戸市

【朗唱箇所・上巻 序文】（序文冒頭より着想を得た創作歌詞）

「古事記を言祝ぐ歌」

- (1) 天地の 初めより成る 言靈の 神威現る 古事記よ
(2) 天津神 生みたもう国 大八洲 高天原より 天孫下る
(3) 美しの 大和まほろば 神さびて 天皇に 豊榮昇れ 豊榮昇れ

2. 古事記伝承会

兵庫県神戸市

4. 腹話術 さくらぐみ

奈良県奈良市

【朗唱箇所・上巻 黄泉の国】

いやはてに、その妹伊耶那美の命みづから追ひ来ぬ。しかして、千引きの石を
その黄泉つひら坂に引き塞へ、その石を中に置きて、おのもおのも対ひ立ちて、
事戸を度す時に、伊耶那美的の命の言らしく、「愛しきあがなせの命。かくせば、
なが國の人草、一日に千頭絞り殺さむ」

しかし、伊耶那岐の命、詔らしく、「愛しきあがなに妹の命。なれしかせば、
あれ一日に千五百の産屋を立てむ」

ここをもちて、一日に必ず千人死に、一日にかならず千五百人生まるぞ。かれ
その伊耶那美的の命を号けて、黄泉津大神といふ。また云はく、その追ひし
きをもちて、道敷の大神といふ。また、その黄泉つ坂に塞りし石は、道反之
大神ともいひ、また、塞ります黄泉つ戸の大神ともいふ。かれ、そのいはゆる
黄泉つひら坂は、今、出雲の国の伊賦夜坂といふ。

【朗唱箇所・上巻 淩能暮呂島】

ここに天つ神諸の命もちて、伊邪那岐命と伊邪那美命、二柱の神に、「この漂
へる國を修め理り固め成せ。」と詔りて、天の沼矛を賜ひて、言依さしたまひき。

3. 新井茂

奈良県奈良市

故、二柱の神、天の浮橋に立たして、その沼矛を指し下ろして書きたまへば、鹽
こをろこをろに書き鳴して引き上げたまふ時、その矛の末より垂り落つる鹽、累
なり積もりて鳥と成りき。これ諺能暮呂島なり。

5、ロマン音曲 大東亜ヒサゴショウ

奈良県奈良市

【朗唱箇所・上巻 天の岩屋】

尔して速須佐之男命、天照大御神に白したまはく、「我が心清く明かし。故我が生らす子手弱女を得つ。此に因りて言さば、自づから我勝ちぬ」と云いて、勝さ

びに天照大御神の營田の阿を離ち、其の溝を埋み、また其の大營聞こし看す殿に屎まり散らす。故然為れども、天照大御神はとがめずて告りたまはく、「屎如すは醉ひて吐き散らすとこそ我がなせの命かく為つれ。また田の阿を離ち溝を埋むは、地をあたらしとこそ我がなせの命かく為つれ。また田の阿を離ち溝を埋むは其の悪ぶる能止まずて転たあり。天照大御神是服屋に坐して神御衣を織らしめたまふ時に其の服屋の頂を穿ち、天の班馬を逆剥ぎに刺きて墮し入るる時に、天の服織女見驚きて梭に陰上に衝きて死ぬ。

故是に天照大御神見畏み、天の岩屋の戸を開けて刺しこもり坐す。尔して高天原みな暗く、葦原中國悉く闇し。此に因りて、常夜往く。是に万の神の声は、狹蝶なす満ち、万の妖悉く発りき。

6、吉田 淳子

大阪府大阪市

【朗唱箇所・上巻 天の岩屋】

ここに天照大御神、怪しと以為ほして、

天石戸を開けて、内より告りたまへるは、

「吾が隠り坐すに因りて、天原自づから聞く、

葦原中國も皆聞けむと以為ふを、何に由りて天宇受売は、樂し、亦、八百万神諸咲ふぞ」とのりたまひき。

爾ち天宇受売、

「汝が命に益りて、貴き神坐ますが故に、歡喜喫樂ぶ」と白言しき。

如此言す間に、

天兒屋命、布刀玉布、その鏡を出しでて、

天照大御神に示せ奉る時に、

天照大御神、逾奇しと思ほして、

稍戸より出でて、臨み坐す時に、

其の隠り立てる天手力男神、

其の御手を取りて引き出しまつりき。

即ち布刀玉命、尻久米縄を其の御後方に控ぎ度して、「此より内にな還り入りましそ」と白言しき。

故、天照大御神出て坐せる時に、天高原も葦原中國も、自から照り明かりき。

7、宇陀 禮子 宇陀 安希子

奈良県奈良市

【朗唱箇所・上巻 天の岩屋】

そこで、アマテラスは不思議に思い、天の岩屋の戸を少し開いて、その中から

こうおっしゃった。「私が石屋にこもっているので天界はおのずと暗く、葦原中國もすべて闇であるうと思われるのに、なぜアメノウズメは歌い踊り八百万の神は皆笑っているのかしら?」そこでアメノウズメが「アマテラス様より貴い神がいらっしゃるので、皆は喜んで笑い、歌い踊っているのですよ」と申し上げると、アメノコヤとフトタマが袖にかけてあつた鏡を差し出しアマテラスにお見せする。アマテラスは鏡に映る自分の姿をますます怪しいと思って、少しづつ戸の隙間から出てきて、鏡を覗いたそのとき、戸の脇に隠れていた怪力のアメノタヂカラヲがアマテラスの手をつかみ石屋の外に引っ張り出す。すぐにフトタマはしめ縄をアマテラスの後ろに引き渡して手をつかみ石屋の外に引っ張り出す。すぐにつトタマはしめ縄をアマテラスの後ろに引き渡して「ここから中へは戻ってはいけません」と申し上げた。こうしてアマテラスが出ていらっしゃって高天原と葦原中國はおのずと明るくなつた。

ていたのですが、聞こえてくるのは楽しそうな笑い声とさけび声、まるで、自分がいかなくともいい、と言うようです。そこで戸を少しだけ開いて様子をうかがいました。「私がこうして隠れてしまつたのに、天の國も地の國も、真っ暗やみでひつそりしていると思っていましたのに、アメノウズメノ命はなぜそんなに踊っているのです? 見物の神々は、なぜそんなに笑っているのです?」アメノウズメノ命は「あなた様よりも尊い神が、ここにおいてになりますので、私達は嬉しくて、笑つたり踊つたりしているのでござります。」と答えました。すかさず二人の神が、アマテラス大御神の前に鏡をさし出しました。見るとそこには、尊い神のお姿が、明るく照り輝いています。自分の姿だと知らないアマテラス大御神は、もっとよく見ようともう少しだけ外へ出ました。その時を待ちわびていたタヂカラヲの神は、日の神の手をとり外で引っ張り出しました。もう一人の神が、「まだ!」と思いつき岩屋の前にしめなわを張り、「これから内へは、二度とお入りにならないで下さい。」とたのみました。

8、門馬米子

奈良県宇陀市

【朗唱箇所・上巻 天の岩屋】

アメノウズメの命の踊りがはじまりました。手拍子足拍子もおもしろく、気が

違つたように踊ります。着ている物も、はだけてしまうくらい勢いのいいこと、おもしろいこと、見物の神々は喜んで、手をたたいて笑いころげたので、高天原がゆれ動くのかと思われるばかりでした。アマテラス大御神は、岩屋の奥に隠れ

9、明日香村伝承芸能保存会 万葉朗唱の部

奈良県高市郡明日香村

【朗唱箇所・上巻 天の岩屋】

天児屋命、布刀玉命、其の鏡を指し出でて、天照大御神に示せ奉る時に、天照大御神、いよいよあやしと思はして、^{やぐら}稍戸より出でてのぞみます時に、かの隠り立てる天手力男神、その御手を取りて引き出しまつりき。すなわち布刀玉命、

尻久米縄をその御後方に控き度して、ここより内にな還り入りそ。」と白言しき。

故天照大御神出でませる時、高天原も葦原も中国も自から照り明りき。

やくもたつ 出雲やへがき つまごみに

やへがきつくる そのやへがきを

爾くして怪しと思ひて御刀の前を以ちて刺し割りて見れば、都牟刈の大刀在り。故、此の大刀を取りて、異しき物と思ひて、天照大御神に白し上げき。是は草那藝の大刀なり。

10、丸山 章

奈良県大和郡山市

【朗唱箇所・上巻 八俣の大蛇】

老夫と老女二人在りて童女の中に置きて泣けり。爾くして、「汝等は誰ぞ」と、問い合わせ。其の老夫答えて、僕が名は足名椎と謂い、妻が名は手名椎と謂う。女が名は櫛名田比賣と謂う」と、言ひき。また問い合わせ、「汝が哭く由は何ぞ」。

答えて白さく、「我の女は本より八たりの稚女在り。是に高志の八俣の大蛇、毎年に来て喫う。今其の来る可き時ぞ。故に泣く」と言ひき。

爾くして速須佐之男の命、湯津爪櫛に其の童女を取り成して御美豆良に刺し、其の足名椎、手名椎の神に、「汝等、八鹽折の酒を醸み、また、垣を作り廻し、其の垣に八つの門を作り、門毎に八つの佐受岐を結い、其の佐受岐毎に酒船を置いて、船毎に其の八鹽折の酒を盛りて待て」と告げき。

故、告げし隨に如其設け備えて待つ時に、其八俣大蛇、信に言の如く来て、乃

ち船毎に己が頭を垂れ入れ其の酒を飲みき。是に飲み酔い留り伏して寝ねき。

爾くして速須佐之男の命、其の御佩せる十拳の剣を抜きて其の蛇を切り散ししかば、肥の河血に變じて流れき。故、其の中の尾を切りし時、御刀の刃毀れき。

11、鈴木 哲也

愛知県名古屋市

【朗唱箇所・上巻 八千矛の神】

八雲立つ 出雲八重垣 妻籠みに
八重垣つくる その八重垣を

12、上田 敏一

奈良県橿原市

【朗唱箇所・上巻 八千矛の神】

八千矛の 神の命は 八島国 妻娶きかねて 遠々し 高志の國に 賢し女を
有りと聞かして 聰し女を 有りと聞こして さ呼ばひに 有り立たし 呼ばひ
に 有り通はせ 太刀が緒も 未だ解かずて 襾衣をも 未だ解かねば 嬢子の
寝すや板戸を 押そぶらひ 我が立たせれば 引こづらひ 我が立たせれば
青山に 鶴は鳴きぬ 野つ鳥 雉は響む 庭つ鳥 鶴は鳴く 心痛くも 鳴く
なる鳥か 此の鳥も 打ち止めこせね いしたふや 天馳使 事の 語り言も
此をば

ニニギは日向の高千穂の峰に下りたちました。

【朗唱箇所・上巻 沼河比売求婚】

この八千矛神、高志國の沼河比賣を婚はむとして、幸行でましし時、その沼河比

賣の家に到りて、歌ひたまひしく、

八千矛の 神の命は 八島國 妻枕きかねて 遠遠し 高志の國に 賢し
女を ありと聞かして 麗し女を ありと聞こして さ婚ひに あり立た
し 婚ひに あり通はせ 太刀が緒も いまだ解かずて 製をも いまだ

解かねば 嬢子の 寝すや板戸を

押そふらひ 我が立たせれば 引こづらひ 我が立たせれば 青山に 鶴
は鳴きぬ さ野つ鳥 雉はとよむ 庭つ鳥 鶴は鳴く 心痛くも 鳴くな
る鳥か この鳥も 打ち止めこせね いしたふや 天使使 事の語言も
是をば

とうたひたまひき。

娘 「姉がおられます。イワナガヒメと申します。」
ニニギ 「私の妻になつてください。」
娘 「私はお答えできません。父がお答えします。」

結婚の申し込みを受けてヒメの父神はたいそうよろこび、たくさんのお祝いの品々を用意し、娘と妹二人いっしょにお嫁入りさせました。

ところがニニギは娘のイワナガヒメがあまりにみにくかったのですぐにおくり返し、美しいコノハナサクヤヒメだけを妻に迎えました。

そこで父神はニニギにこう伝えました。

「わが娘を一人いっしょにさしあげたのは深いわけがあったのです。あなた様のお命が、イワナガヒメには岩の如く不变であるよう願つてのことあります。それには華が咲きほころがごとく榮えるようと願つてのことあります。それなのに娘を追い返し、妹だけを妻となさつたので、あなた様のお命は花のようにはかないものとなるでしょう。」

このときから人の寿命が短くなってしまったということです。

ニニギノミコト（コノハナサクヤヒメとイワナガヒメ）

高天が原のアマテラスオオミカミは孫のニニギノミコトに地上の国を治めるよう命じました。天孫降臨です。

【朗唱箇所・上巻 木花の佐久夜麗売】

14、右京おはなしの会

の中で立派に三人の男子を生みました。

のちに長男が海幸彦、末っ子が山幸彦となります。

むとする時、菅畠八重・皮畠八重・純畠八重を以ち波の上に敷きて、其の上に下り坐す。是に其の暴き浪自づから伏し、御船え進みき。尔して其の後の歌ひて曰く、

さねさし 相模の小野に
燃ゆる火の 火中に立ちて

15、清田洋子

奈良県北葛城郡河合町

【朗唱箇所・中巻 沙本昆古の反逆】

沙本昆古王、其のいろ妹を問ひて曰はく、「夫と兄と孰れか愛しき」といふ。答えて曰く、「兄ぞ愛しき」といふ。尔して沙本昆古王、謀りて曰く、「汝まことに我を愛しと思はば、吾と汝と天の下治らさむ」といひて、八塙折の紐小刀を作り、其の妹に授けて曰く、「此の小刀以ち、天皇の寝ませるを刺し殺せまつれ」といふ。故天皇、其の謀を知らしめさずて、其の後の御膝を枕き、御寝し坐しぬ。尔して其の后、紐小刀以ち、其の天皇の御頸を刺しまづらむと為。三度挙りて、哀しき情に忍へず、頸を刺すこと能はずて、泣く涙、御面に落ち溢る。

16、賣多神社古事記輪説会

奈良県大和郡山市

【朗唱箇所・中巻 優建命の東征】

其より入り幸でまし、走水の海を渡る時に、其の渡の神、浪を興し、船を廻らし、え込み渡らず。尔して其の后名は弟橘比売命白さく、「妾、御子に易はりて海の中に入らむ。御子は遣はさえし政遂げ覆奏すべし」とまをす。海に入ら

17、西大和保育園 西大和塾のみなさん

奈良県北葛城郡河合町

【朗唱箇所・上巻 因幡の白兎】

ナレーション スサノオさまの子どもの子ども、そのまた子どもとずっと統いて大国主の命は生まれました。大国主さまは、大勢の兄きましたちと広い出雲の国の野原を飛びまわって大きくなりました。因幡の国に八上姫というそれはそれは愛らしいお姫様がいました。お兄さまたちは自分こそ、八上姫と結婚しようと考えました。

ある日、兄さまたちは八上姫に会いに行く事になりました。兄さまたちは大国主さまに自分たちの荷物を持たせ、大国主さま

は文句も言わずに、みんなの荷物を持ちました。兄さまたちは

どんどん先に行ってしまい、大國主はずっと遅れて歩いて行きました。すると、海に突き出た氣多の岬で毛をむしられた兎が痛そうにうずくまつていました。その兎を観た兄さまたちは、

兄さま
ナレーション
「海の水を浴びて風に吹かれて寝ておれ。治るぞ。」

兄さまたちは笑つてこういうと行つてしましました。うさぎは言うとおりにしました。海の水が乾いてくると、赤むけの肌は、ひりひりずきんずきんと痛みました。

兎
ナレーション
「痛い痛い。」

兎が泣いているところへ大國主さまがとおりかかりました。

大國主の命
「かわいそうに。どうしたのだ。」

兎
ナレーション
「はい。わにざめに毛をむしられました。」

大國主の命
「それはひどい。どうして？」

兎
ナレーション
「わたしがわにざめに嘘をついたからです。」

うさぎは海のそばで遊んでいて波にさらわれたことから話しました。

した。

兎
ナレーション
「私は隱岐の島にいて、この地に渡ろうとしましたが、その術はありませんでした。そこで海に住むわにを欺き「私とあなたを比べて、どちらの方がいちぞくの数が多いかを教えてあげよう。あなたはありつたけの一族をことごとく率いてきて、この島から氣多の岬まで列になつて伏して並びなさい。そうしたら

私はその上を踏んで、走りながらその数を数えましょう。」と言いました。わにが騙されて列になり、兎は数を数えながら渡り、まさに地に下りようとした時、私が「君たちは私に騙されたのだ」と言い終わるや否や、一番端に伏していたわにが私を捕えて、私の毛をことごとく剥ぎ取つてしまつたのです。」

「そうだったのか、今すぐ河口に行き、きれいな水で体を洗い、そして蒲の穂の花粉を取つて敷き散らして寝ていなさい。そうすれば元の通りに治るでしょう。これからは、どんな時にも騙したりしてはいけないよ。」

ナレーション
兎は教えられたとおりにし、ものきれいな白兎になりました。

このうさぎは「因幡の白兎」と呼ばれています。

18、萌黄

東京都世田谷区

【朗唱箇所・上巻 倭建命の東征】

それより入り幸でまして、走水の海を渡りたまひし時、その波の神浪を興して、船を廻らして、得進み渡りたまはざりき。ここにその後、名は弟橘比売命白しまひしく、「妾、御子に易りて海に入らむ。御子は遣はさえし政を遂げて覆奏したまふべし。」とまをして、海に入りたまはむとする時、普賢八重・皮賢八重・純賢八重を波の上に敷きて、その上に下りましき。ここに其の暴浪自ら伏きて、

御船得進みき。ここにその后歌曰ひたまはく。

さねさし 相模の小野に 燃ゆる火の 火中に立ちて 問ひし君はも

とうたひたまひき。故、七日の後、その後の御櫛海邊に依りき。すなはち其の櫛を取りて、御陵を作りて、治め置き。

20、神野榮美

大阪府松原市

【朗唱箇所・下巻 引田部赤猪子】
日下江の 入江のはちす はなばらす

身の盛り人 ともしきろかも

19、このはなさくらレデース

三重県名張市

【朗唱箇所・上巻 優建命の東征】

それより入り幸でまして、走水の海を渡りたまひし時、その渡の神、浪を興して、船を廻らし、得進み渡らず。しかして其の后名は弟橘比売命白さく、「妾、御子に易りて海に入らむ。御子は遣はさえし政を遂げて覆奏したまふべし。」とます。海に入りたまはむとする時、首脳八重・皮脣八重・施脣八重を以ち波の上に敷きて、その上に坐す。是に其の暴浪自ら伏し、御船得進みき。

ここにその後歌曰ひたまはく。

さねさし 相模の小野に 燃ゆる火の 火中に立ちて 問ひし君はも

とうたひたまひき。故、七日の後、その後の御櫛海邊に依りき。すなはち其の櫛を取りて、御陵を作りて、治め置き。

21、榎本保夫 榎本妙子

愛知県半田市

【朗唱箇所・下巻 安岐豆野】

安岐豆野に幸でまして、御廻りしたまふ時に、天皇、御興床に坐しき。しかして、姐御腕を咲ひつ。蜻蛉來て、其の蝶を咲いて、飛ぶ。是に御歌を作りたまふ。其の歌に曰りたまはく。

み吉野の 袁牟瀬が岳に

猪鹿伏すと

誰そ 大前に申す

やすみしし 我が大君の

猪鹿待つと 猿床にいまし

白鷺の 袖著具ふ

手附に 蜻蛉まよ

その蝶を 蜻蛉早咲ひ

かくのごと 名に負はむと

そらみつ 倭の國を

鯖蛤島とふ

故其の時より、其の野を号けて安岐豆野と謂ふ。

23、米崎和美

大阪府守口市

【朗唱箇所・中巻 矢河枝比売】

この蟹や何處の蟹。百伝ふ角鹿の蟹。

横さらふ何處に到る。伊知遜島美島に着き、

みほどりの潜きづき、しなだゆふ佐佐那美道を

すくすくと我が行ませばや、木幡の道に遇はしし娘子、

後方は、小橋ろかも。歎並は椎蔓なす。

櫻井の丸爾坂の土を、初土は膚赤らけみ

底土は丹黒き故、三つ栗のその中つ土を、

頭突く真火には當てず、眉書き濃に書き垂れ

遇はしし女。かもがと我が見し児ら

かくもがと我が見し児に、うたたけだにひるかも

い副ひ居るかも。

24、塩谷邦明

富山県射水市

【朗唱箇所・下巻 葛城山】

葛城山に登り幸でます時に、百官の人等、悉く紅に紐着けたる青緋の衣を給はり
服たり。彼の時に其の向かへる山の尾より、山の上に登る人有り。既に天皇の御
輦に等しく、また其の東装の状と人衆、相似て傾かず。尔して天皇望けたまひ、

水をうこをろに、是しもあやに畏し
たかひか
高光る 日の御子 事の語り言も こをば

22、三宅古事記朗唱の会

奈良県磯城郡三宅町

【朗唱箇所・下巻 三重の采女】

纏向の 日代宮は 朝日の 日照る宮
夕日の 日翔る宮 竹の根の 根足る宮
木の根の 根道ふ宮 八百土よし い杵築の宮
真木さく 檜の御門 新嘗屋に 生ひ立てる
百足る 槓が枝は 上つ枝は 天を覆へり
中つ枝は 東を覆へり 下枝は 地を覆へり
上つ枝の 枝の末葉は 中つ枝に 落ち触らばへ
中つ枝の 枝の末葉は 下つ枝に 落ち触らばへ
下枝の 枝の末葉は あり衣の 三重の子が
拂がせる 瑞玉盆に 浮きし脂 落ちなづさひ

問はしめ曰りたまはく、「茲の倭國に、吾を除き、また王無し。今誰人ぞ此くて行く」とのたまふ。答へ曰せる状も、天皇の命の如し

25、西大和トリオ

奈良県北葛城郡河合町

【朗唱箇所・中巻 美和の大物主神】

是に男壯夫有りて、其の容姿威儀時に比無し。夜半のとき、たちまちにきたる。故相感でて共婚むして供に住める間に、未だ幾時も経ぬに、其の美人姫身ぬし事を怪しみて、その女に問ひて曰はく、「汝は自ら姫めり。夫无く何の由にか姫身める」「うるはしき壯夫ありて、其の姓名も知らぬが、夕毎にきたりて供に住める間に自ら懷妊みぬ」といひき。(中略)糸の従に尋ね行けば、美和山に至りて、神の社に留りき。(中略)故其の麻の三幻造りしに因りて、其の地を名付けて美和と謂ふなり。

26、白神裕子 上泉貴世

奈良県奈良市

【朗唱箇所・中巻 優建命の東征】

さねさし 相模の小野に 燃ゆる火の
火中に立ちて 問いし君はも

27、西大和保育園 未来組①のみなさん

奈良県北葛城郡河合町

【朗唱箇所・上巻 八俣の大蛇】

雲の中に神様の国、高天原がありました。そこには天照大御神という女神が治めておられました。

天照大御神の恼みの種は、弟君の須佐之男で誰のことも聞かず暴れ者だったの、女神は須佐之男を高天原から追い出してしまわれました。

人間の国へと降りて来た須佐之男は、泣いている老婦人と娘に出会いました。「私たちには娘が八人おりました。しかし、毎年、八俣の大蛇が来て、一人ずつ娘を食らっていきました。その大蛇が、もうすぐやつて来ます。最後に残った、この櫛名田姫とも別れると思うと悲しくなりません。」

「大蛇の目はほおずきのように赤く、一つの胴体に、八つの頭、八つの尾があり、体には苔や榆、杉が生え、その大きさは八つの谷と峰をまたぐほど。腹はいつも血でにじんでいます。」

「よし、私がその大蛇を退治しよう」と、言うと娘を櫛に変え、髪の毛に差しました。

須佐之男は、老婦人に命じました。「濃い酒を造り、垣根を張り巡らせ八つの門を作りなさい。」

そして、酒を注いだかめを置かせ、隠れて待つておりました。
空はどんどん暗くなり、稻妻が光り、雷が鳴りました。
八つの鎌首をもたげた大蛇が現れたのです。

大蛇が息を吐けば、それは嵐となり、大岩が飛んで行きます。

大蛇の八つの頭は、地を這い、何かを探しているようでした。

そして、辺りに漂う酒のにおいに釣られて、八つの頭を八つのかめにつけて、飲み始めました。

大蛇は赤い目をさらに赤くして、がぶがぶと飲み干しました。

そして大いびきをかいて寝てしまったのです。

良い土地がありました。

そこは、大地から目に見えない力が吹き出している神聖な場所でした。

「何とすがすがしい所だ。」

須佐之男は、その地を須賀と名付け、そこに立派な宮殿を建てました。

やがて宮殿が完成した時、二人を祝福するかのような雲が、むくむくと立ち昇りました。

その情景を、須佐之男は歌に詠みました。

八雲立つ 出雲八重垣 妻籠みに

八重垣作る その八重垣を

この三十一文字が和歌の始まりと言われています。

【朗唱箇所・上巻 八俣の大蛇】

この時を待っていた須佐之男は、そつと、大蛇に近付いて、刀を抜き、大蛇の八つの頭を次々に切り落としました。

胴体から血がどうどうと吹き出し、血の海の中に大蛇の首がごろんごろんと転がりました。流れ出た血は川に流れ込み、川は真っ赤に染まりました。

須佐之男は、とどめを刺そうと、胴体を、次に尻尾を切り始めました。すると力キツと、刀の刃が欠けてしまったのです。

不思議に思って、そこを裂くと、一振りの太刀が、輝いていました。

須佐之男は、その太刀を高天原でさんざん迷惑を掛けたおわびに、天照大御神

に差し上げました。

その後、須佐之男は、柳名田姫と結婚しました。

ある日、二人が新しく住む所を探して、出雲を歩き回っていると、見晴らしの

賣太神社古事記輪読会 有志
会場の皆さま

【朗唱箇所・上巻 初発の神々、国生み・神生み】

天地初めて発くる時に、高天原に成り

ませる神の名は、天之御中主神。次に

高御產巢日神。次に神產巢日神。此の三柱の

神は、みな独神と成り坐して、身を隠したま

ふ。

次に成りませる神の名は、國之常立神。次に豊雲野神。此の二柱の神も、独神と成り坐して、身を隠したま

ふ。

次に成りませる神の名は、宇比地逐神。次に妹須比智迹神。次に角杙神。次に妹活杙の神。次に意富斗能地神。次に妹大斗乃弁神。次に於母陀流神。次に妹阿夜詞志古泥神。次に伊耶那岐神。次に妹伊耶那美神。

上の件、國之常立神より以下、伊耶那美より以前を、并せて神世七代と称ふ。

是に伊耶那岐命、まづ言ひたまはく、「あなたにやし、えをとめを」とのりたまひ、後に妹伊耶那美命言ひたまはく、「あなたにやし、えをとこを」とのりたまふ。かく言ひ竟へて、

御合ひたまひ、生める子は淡路の穗の狭別嶋。次に伊豫の二名嶋を生む。此の嶋は身一つにして面四つ有り。面毎に名有り。故伊豫國を愛比売と謂ひ、讚岐國を飯依比古と謂ひ、粟國を、大宜都比売と謂ひ、土左國を建依別と謂ふ。次に隱伎の三子の嶋を生みたまふ。次に筑紫嶋を生みたまふ。此の嶋も身一つにして面四つ有り。面毎に名有り。故筑紫

國を白日別と謂ひ、豊國を豊日別と謂ひ、肥
國を建日向日豊久士比泥別と謂ひ、熊曾國を
建日別と謂ふ。次に伊岐嶋を生みたまふ。次
に津嶋を生みたまふ。次に佐渡嶋を生みたま
ふ。次に大倭豊秋津島を生みたまふ。故此の
八嶋をまづ生みたまへるに因りて大八嶋国と
謂ふ。

既に國を生み竟へ、更に神を生みたまふ。
故、生みたまへる神の名は、大事忍男神。次
に石土毘古神を生みたまふ。次に石巢比売神
を生みたまひ、次に大戸日別神を生みたま
ひ、次に天之吹男神を生みたまひ、次に大屋
毘古神を生みたまふ。次に風木津別之忍男神
を生みたまひ、次に海の神、名は大綿津見神
を生みたまひ、次に水戸の神、名は速秋津日
子神を生みたまふ。次に風の神、名は志那

都比古神を生みたまふ。次に木の神、名は久々
能智神を生みたまひ、次に山の神、名は大山
津見神を生みたまひ、次に野の神、名は鹿屋
野比売神を生みたまふ。

次に生みたまへる神の名は、鳥之石楠船
神、次に大宜都比売神を生みたまひ、次に
火之迦具土神を生みたまふ。

おほよそ伊耶那岐・伊耶那美の二柱の神、
共に生みたまへる嶋、壱拾四嶋、また神、
参拾伍の神。

故伊耶那美神は、火の神を生みたまひしに
因り、遂に神避りましぬ。

出典 小学館 新潮社 角川ソフィア文庫 岩波文庫

〔新編 日本書紀全集1 古事記〕(校注/訳/山口佳紀 神野志隆光)
〔新編 日本書紀現代語訳付〕(校注/中村啓信)
〔古事記〕(校注/倉野嘉司)